

事例研究・女子高校生の雑談

小林 美恵子

1 はじめに

若者たちが仲間うちで気のおけない雑談をしているのを端から聞いていると、話の流れがつかみにくかったり、時には話していることばそのものさえ外国語のように聞き取りにくかったりすることがある。その原因としては非常に早口であること、母音が脱落して子音が連続したり、アクセントが平板化するなどの発音の変化、いわゆるわかもの言葉などを含む特有の語彙の使用などがよく言われるが、さらに談話の構造についても年長者のそれとは違った面があるのではないかと考える。そこで小論ではこの点に着目して、若者の雑談の構造的な特徴について、実際に行われた自然談話の1例を分析・考察することとしたい。

資料として用いたのは東京都多摩地区の都立高校1年生の女子6人（資料中、M・T・S・K・O・Nと表される）が昼休みに昼食をとりながら行なった約16分423発話の雑談を録音・文字化したものである。採録にあたっては6人のうちの1人（T）に小型録音機での録音を依頼した。他の5人には録音をすることは特に説明はしなかったが、聞かれたら言うようにTには話しておいた。実際にはウォークマンなどの小型機器に慣れているせいもあって、録音に対する疑義は特になかったようである。

ところで、実は筆者ははじめてこの録音テープを聞いたとき、賑やかな教室内で録音されたものであること、話しているのが女性ばかりで話者が特定しにくいことはあるにしても、ほとんど話が聞き取れず、話の流れもつかめなかった。文字化に際しては、まずTとともにテープで聞いて場面や話者について説明を受けTに一応の文字化をしてもらった上で、筆者がそれをテープとさらに照合して話されたことばを特定していくという方法をとった。こ

のことからも本資料が他者の介入しにくい若者の雑談の特徴の一端を示しているものだといえよう。

発話の単位の認定については次の基準によって行った。

- 明らかな文末的用法によって文が完結している文（倒置文を含む）については1発話と数える。
- 文が完結していなくても、発話を中断し新たに言い起こす場合や、次の話者が発話を始めた場合にはその前までを1発話とする。
- 笑いのみが発声は1発話とする。ただし笑いの長さについては特に問題としない。

以上の基準によって認定した発話は423であり、このうちに笑い声だけの発話が36あった。

対照資料として、現在日本語研究会が行った共同研究「職場における女性の話しことば」で採録・文字化した成人女性の雑談資料のうち次のものを用いた。

- 40代女性編集者が職場の休憩時間に複数の男女同僚と行った談話。
約10分 216発話……以下略号 [HA] とする。
- 30代女性高校教員が始業前に職員室で主に2人の男性同僚と行った談話。
約9分 198発話……以下略号 [HI] とする。

なお対照資料の発話数はいずれも談話への参加者全員の発話の総数である。ちなみにそれぞれの1分あたり発話数を比較してみると [HA] 21.6 [HI] 22.0に対して高校生は27になる。発話のない間などもそれぞれにあるので、これはおおまかな目安にすぎないが高校生の話し方は成人にくらべかなり早口であると言えよう。

2 話題の展開と発話者の位置

表1 高校生の雑談における話題と発話者（数字下段は％）

No.	話題の内容/ 話者発話数	M	T	S	K	O	N	合計
① -1	Mの箸の持ち方と箸箱 について	50 57.5	19 21.8	6 6.9	10 11.5	0 0.0	2 2.3	87 100
① -2	家庭科で配られた箸に ついて	0 0.0	1 100	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 100
① -3	男子生徒のかわいい箸 箱と弁当について	3 17.6	2 11.8	2 11.8	6 35.3	4 23.5	0 0.0	17 100
② -1	登校せず旅行に入った 男子生徒Xについて	76 42.7	54 30.3	27 12.9	21 11.8	1 0.6	3 1.7	178 100
② -2	Xのように自転車でご こかへ行こう	22 56.4	6 15.4	4 10.3	6 15.4	1 2.6	0 0.0	39 100
② -3	髪を染めたりする「つ っぱり」男子について	14 31.8	5 11.4	2 4.5	11 25.0	11 25.0	1 2.3	44 100
② -4	いろいろな人がいてお もしろいという感想	6 46.2	6 46.2	1 7.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	13 100
③	「～さん」という呼び 方について	3 33.3	6 66.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	9 100
④	Kが体育で首を痛めて しまったこと	3 15.8	2 10.5	1 5.3	11 57.9	2 10.5	0 0.0	19 100
⑤	Nが弁当のおかずを落 としてしまった	1 33.3	1 33.3	1 33.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	3 100
⑥	食事後の行動について の打ち合わせ	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 50.0	2 50.0	0 0.0	4 100
⑦	ゴミの処理のことなど	3 37.5	3 37.5	0 0.0	2 25.0	0 0.0	0 0.0	8 100
合 計		181 42.9	105 24.8	40 9.5	69 16.4	21 5.0	6 1.4	422 100

(注) 発話数合計が422であるのは複数話者の笑い発話1を除いたためである。

表1は高校生の雑談について、話されている内容ごとのまとまりを一つの「話題」として、話題の内容とそれぞれの話題における各参加者の発話数をまとめたものである。さらに図1にはそれらの話題がどのように展開していくのかを示した。

表および図中で話題は内容によって①～⑦の番号で示しているが、特に①-1～3、②-1～4は内容的に関連していると考えられる話題である。また図1で括弧内に示した記号および数字はそれぞれの話題の発話者および話題の開始から次の話題が提起されるまでに全参加者の行った発話の総数である。

表および図によって、この一連の談話の展開とそこに占める各話者の位置について次のようなことが分かる。

2-1 話題転換の構造

話題の中心となっているのは中間考査後学校を休み鹿児島へ自転車旅行に出かけてしまった男子生徒Xへの興味(②-1)およびそれに関連する(②-2～4)と、箸が上手に使えないというMとMの箸箱についての他者の感想・批評を含む(①-1)とそれに関連する(①-1～2)で、②は274発話、①は105発話と全体の89.6%を占めている。図1からわかるようにこれらの各話題は順次直線的に展開していくのではなく、他の話題に展開した後再び元的话题に戻るという、いわば「蒸し返し」を重ねて、談話の最後まで繰り返して語られている。④についても同様に談話の途中で一度提起された後、他の話題にとって変わられるが最後にまた改めて提起されている。図中の3線は上から①②④についてそれぞれの現れ方を示したものである。語られているのは内容的には12話題であるが、話題の展開の回数は28回に上る。平均して15発話程度で次の話題への展開をしていることになる。特に①(1発話)⑤(3発話)のように非常に短い話題も多く、話題の展開のテンポがきわめて慌ただしいとの印象を受ける。

2-2 各話者の発話

28回の話題展開のうち12回はMによって語り起こされている。発話数もMは181回(42.9%)と最も多く①-1、⑥を除くすべての話題において発話をしており、この談話をリードし、中心になっていることがわかる。TはMについて発話数が多いが、全発話の67.6%にあたる71発話が②に関するもので、特に②-1での発話がその大半を占める。Kの発話数69は談話全体の層発話数のおよそ6分の1にあたり、バランスのよい平均的な発言をしていると言えよう。各話題における発話数を見ていくと、Tが比較的多く発話している話題についてはKの発話が少なく、Kの発話の多いものについてはTの発話が少ないという傾向がある。TKは話題の転換を7回ずつ行っており、MTKの3人によっておもに談話の流れが作られているといえるが、さらにM-Tを中心とする談話、M-Kを中心とする談話がそれぞれあることがわかる。

SOは話題の転換がそれぞれ1回ずつ、Nは皆無で、3人の話題の受け手に回っているといえる。ことにNは発話数も6回と少なく、ほとんど聞き手としてのみ存在している。Oについては①-3、②-3で比較的发話の多いのが目だが、これはいずれもKが多く発言している話題である。また⑥ではKとOのみが発話しており、OがKと親しいという関係によってこの談話に参加していることが伺える。なお、KとOは実は図の1段目、談話開始後2分間は2人だけで別の会話を行っている。(内容については録音不明瞭で文字化できず)SについてもOと同様の傾向がやや見られるようである。Sの場合、比較的发話が多い①-1、②-1はいずれもM-Tの発話を中心とする話題であり、②-4、⑤ではMTSのみが発話している。

なお12話題のうち、6人全員が発話しているのは②-1、②-3だけである。5人が発話しているのが①-1、②-2、④で、6人の談話といっても、かなりの部分は一部の者しか参加していないことになる。

2-3 談話の転換の契機

ところで、このように小刻みな話題の転換はどのようなきっかけによって行われるのであろうか。一般的な話題の転換では前の話題が完結したり、中断によって間がおかれた後に、それと関連する、もしくはまったく新しい話題が語り起こされる。高校生の談話においてもこのようなものは多く、28例中16例を占めている。ここでは、それ以外に特徴的だと考えられる例をあげる。

● 割り込みによる話題転換 (①-2)

提起者のTは箸の持ち方について母にいわれたことを話すMにあいづちをうちながら聞いているが突然に次のような話題を提起する。(冒頭記号は発話の通し番号および発話者を表す。以下同じ)

021T どうでもいいけどさ あの 配られたお箸 塗りの箸でしょ、すぐくすべったんだけど。

「どうでもいいけどさ」というのは前者の発言をまったく無視したおそるべきことばである。これに対するMもまたTの発言を無視し、母との会話について語り続ける。Tも特に答を求めていたのではないらしく、またMにあいづちをうつ。このような「割り込み」に類すると見られる話題転換はほかに4例ほどある。いずれの場合も数話の発話で修正されてもとの話題に戻ったり、新たな話題へと展開するが、割り込んで提起した者もこだわることなく新話題に加わっていく。

● 突発的な事態に対する感覚的な反応を契機とする話題転換

③⑤および図中3段目(7m)の②-1がこれに該当する。③はその前の発話で「Mさん」と呼びかけたTがそのことに気づき「あっ」と声をあげたことから始まる。(あらかじめ愛称で呼び合う約束があったのに忘れた)⑤はNが箸をすべらせ弁当のおかずを落としたことへのSの「あっ」から始まる。いずれも短い話題である。②-1は話題の男子生徒Xが髪を赤く染めた姿で突然教室に現れたことをきっかけとする提起で次のように展開する。

- 153M でも グリンピース (①-1の話題の続き。グリーンピースがうまく掴めないことを言いかけた発話)
- X登場 (男子生徒「オッ」 教室内騒然とする X「コンチワース」)
- 154M びっくりしたあ
- 155S それでも それでも 見直した? (前半の②-1でXに好意的な発言をしたTに対して)
- 156M おもしろーい
- 157T も だめ だめ
- 158M (笑)

Sの発話以外はXを見たそれぞれの情動的な発話で、各自が自分の感じたことを声に出しているにすぎず、受け答えのある会話になっていない。このような情動的な発話の羅列は実はこれ以外の話題においてもしばしば見られるところである。

2-4 成人女性の話題転換との比較

成人女性の雑談の場合、話題はどのように展開されているだろうか。次に対照資料[H A][H I]について高校生のそれと同様に図示する(図2・3)

(括弧内は発話数。転換の話者については特定できないものもあり明示しなかった)

① (64) ② (38) ③ (39) ④ (29) ⑤ (23) ⑥ (18) ⑦ (5)

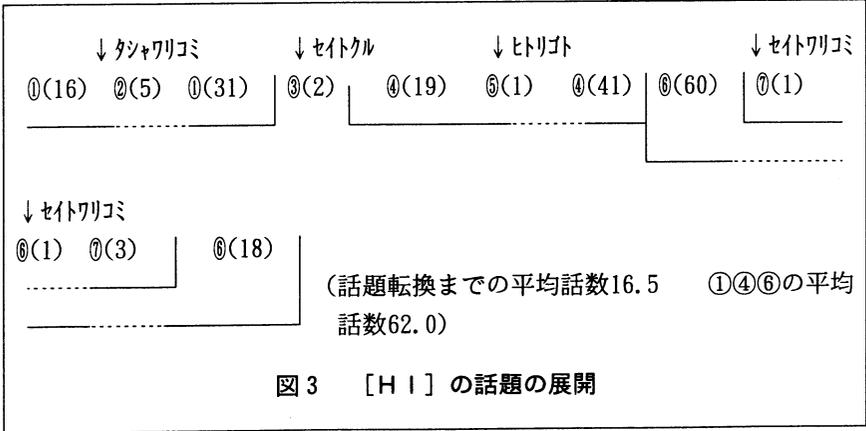
(1話題の平均話数30.1)

図2 [H A]の話題の展開

(話題内容)

- ① 船戸与一の小説について
- ② 「新宿鮫」の映画化について

- ③ 好きな作家に「はまる」ことについて
- ④ 文庫本の活字は小さい
- ⑤ 読書の早さと活字
- ⑥ 立ち読みについて
- ⑦ 録音機での採録についての感想



(話題内容)

- ① 同僚に五千円札を崩してほしいと頼まれ応じる。
- ② 病気で入院中の同僚を気遣う (それまで離れていた同僚が話しかける)
- ③ 生徒がきたのに応じる (談話に加わっていない同僚と生徒の対話)
- ④ 朝寝坊して出勤した同僚の朝食作りについての話
- ⑤ 「なんか咽が痛い」 (独り言?)
- ⑥ 同僚の庭に咲いた季節はずれのバラの話
- ⑦ 生徒がきて話しかけたのに応じる

[HA] の場合①～⑥はすべて読書に関する話題で同じ話が繰り返された
り、他の話題に割り込まれたりすることはなく直線的に進んでいく。[HI]
はそれよりやや複雑だが、これは後から場に登場する者によって割り込み的
な発話が行われたり、独り言と思われる発話があったりすることによるもの

で、中心となる①④⑥の話題はやはり直線的に進み、後から蒸し返されるということはない。どちらの談話でも、ある話題が提起された後、参加者たちは自分の考えや経験をのべたり、これに対しての応答を繰り返し、話題内容がある量語られ、内容が完結したり、用件が終了したり、また各話者がある程度発話をした後で次の関連する話題に展開して行くまで、その話題に共同し集中して参加している。

高校生の談話では2-2、2-3に見られたような、一部の参加者の間でのみかわされる発話、他者の発話の最中に自分が思いついたことを割り込んで述べる話題提起、突発的な状況に対する情動的な発話による話題の転換などが2-1で延べたような複線的、拡散的な話題展開の構造を生み出していると考えられよう。彼らの意識は一つの話題に共同、集中していくというよりは、その時自分の感じたこと、思いついたことをそのままに口に出そうとするものである。それを聞いてくれる相手があればそこに話題が成立することになる。このような談話はその場においてそれぞれの発話の状況を攔んでおり、他者の発言や発言に対する無視に対して想像・共感ができる者でないかぎりその流れを理解することはきわめて難しいだろう。

ところで、一般的に各人が言いたいことを勝手気ままに言っているなかでは、談話は成立しにくいし他者の発言への想像や共感も生まれにくいと考えられる。高校生の談話が談話として成立するためには、自己中心的な話題提起を補完するなんらかの要素があると考えられる。次に話題の受け手としての発話に着目してこの点について考えてみたい。

3 受け手発話の分析

表2は全発話から話題転換の発話28を除いた395発話について、前発話との関係がどうなっているかを分類しまとめたものである。併せて対照資料[HA][HI]についても同様の分類をした。この表に現れた高校生の受け手発話に目だつのは、自分の前発話を繰り返し強調する発話(I-3)、前発話を繰り返して確認したり共感を表す発話(II-2)、前発話に反対す

表2 受けて手発話の種類（数字下段は％）

発話の種類／ 話者発話数		M	T	S	K	O	N	合計	H A	H I
自分の 発話 I	(1)前発話の発展・補足 (あいづちを挟む場合含)	56	13	1	11	3	0	84 21.3	50 23.9	69 37.1
	(2)前発話から質問・依 頼・同意を求める	2	0	0	1	0	0	3 0.8	0 0.0	1 0.5
	(3)前発話の繰り返し 強調	5	0	0	1	2	0	8 2.0	1 0.5	1 0.5
他 者 の 発 話 を 受 け る II	(1)あいづちをうち次の 発話を促す	6	15	7	2	2	0	32 8.1	20 9.6	17 9.1
	(2)前発話を繰り返す 確認・共感	4	4	1	7	2	1	19 4.8	3 1.4	4 2.2
	(3)前発話の確認。前発 話を補う	2	1	1	0	0	0	4 1.0	0 0.0	0 0.0
	(4)前発話に同意・賛成 する意見・感想	27	15	15	15	2	2	* 77 19.5	58 27.8	24 12.9
	(5)前発話への驚き・反 意・疑問を示す	2	5	0	1	0	0	8 2.0	5 2.4	7 3.8
	(6)前発話に反対する意 見・感想	6	4	1	3	2	0	16 4.1	6 2.9	4 2.2
	(7)前発話に対する客観 的な意見・感想	23	12	5	8	3	0	51 12.9	20 9.6	11 6.0
	(8)前発話を無視した自 分の意見・感想	16	4	3	3	1	0	27 6.8	4 1.9	0 0.0
	(9)前発話の質問・依頼 などに答える	17	11	1	3	2	0	34 8.6	16 7.7	14 8.1
	(10)前発話を受けて質問 依頼・同意を求める	1	13	3	7	1	3	28 7.1	17 8.1	18 9.7
(11)その他 (挨拶語など)	0	0	0	0	0	0	0 0.0	2 1.0	6 3.2	
(12)中断・不明により意 味のつかめないもの	2	1	1	0	0	0	4 1.0	7 3.3	9 4.8	
合計	(総発話数－話題転換 発話数)	169	98	39	62	20	6	395 100	209 100	186 100

(注) *は複数の笑い発話を(+)1した。

る立場での意見・感想の提示（Ⅱ-6）、前発話を無視して自分の意見・感想を述べる（Ⅱ-8）がそれぞれ成人の談話よりやや多いことぐらいで、これらはⅡ-8を除いてはそう際だった特徴というわけでもない。Ⅱ-8は話題転換に見られた割り込みと同じく自分の思いついたことに相手の発言にかまわず口に出すという、この高校生たちの談話の特徴がここにも現れていると見るべきであろう。Ⅰ-3、Ⅱ-6やⅡ-12の中断したり口ごもったりして前発話との関係が掴みにくい発話が少ないことも含め、それがいかなる立場であれ言いたいことは言うという発話の特徴もこの傾向と一致する。このような傾向が特に強いのはMで、自身の前発話を受ける発話が多いこと（簡単にいえば長く話すことが多いわけである）（Ⅰ-1～3）やⅡ-8が多いのもMである。

いっぽう他者の発話を繰り返す発話は自分が他者の発話に同意し共感しているということを示すだけで自身の新しい意見や情報をそこに加えているわけではない。その意味ではいわゆる「あいづち」などとも近く、「あいづち」よりさらに共感の意を強め仲間意識を密にする発話であると言えよう。この発話は全体としても成人の倍以上見られるが、特に多いのはKとOで、それぞれ全発話の11.3%、10.0%と高率でこの発話をしている。発話数の少ないNにもこの発話は1例見られる。「あいづち」は全体では8.1%と成人よりやや少ないが、Tでは15.3%、Sでは17.9%と高率で現れる。KやOが繰り返すことによって行っている他者の発話を聞き理解していることの表示をT、Sは「あいづち」によって行っていると言えよう。

ところでⅡ-10は他者に対して質問や依頼などをした発話であるが、これに答えるⅡ-9が成人女性ではいずれもⅡ-10より少ない。すなわち質問されたことに答えていない場合があるということになる。これに対して高校生の場合はすべての質問・依頼になんらかの形で回答がなされている。（Ⅱ-10が9より6例多いのは、話題転換での発話に答えたものや、特に質問形式でだされたのではないことばに回答形式に答えたものも含むからである）この点から見ても、高校生が自分の言いたいことは言いながらも、他者の問い

かけ等には丁寧に応じている様子を見ることができる。

4 まとめ

以上高校生の1談話の実態を、話題の転換の形や受け手発話の形式から見てきた。

この高校生たちの談話では、自分の思いついたことを、進行中の話題を遮って発話したり、突発的な事態に対して情動的な反応をすることから話題がそれまでと無関係な方向に飛躍したりすることによって、話題の展開が拡散的になっている。それと同時に、同級生のXに関する、だれもが興味を持っている話題が、その関連・発展的な話題をも含め複数の発話者から繰り返し提示される。また一人は箸の持ちかたに悩んで、折りあるごとにその話題を持ちだし、一人は首の痛みを訴えることを繰り返すというふうに、発話されない時にも参加者の意識のなかにある話題のいわば底流ともいうべきものが、この話題展開を複線的なものにしていることがわかった。

いっぽう、話題の受け手の側は仮に話題が飛躍した場合にもあまり抵抗なくこれに受けいれようとする姿勢を持っていることが、あいづちの量や繰り返しの発話に見られる。逆に割り込んだ側がその発言を無視された場合にも、そのことにこだわらずもとの話題に戻っていくことも伺われる。前者の発話に対する反意の発話も少なくはなく、首が痛いと訴えるKに対しても同情的な発話は特になく「私もマットで背中を打った」と自分のことを述べるという反応だが、そのことが全体の談話の雰囲気壊すこともない。論理ではなく、場をともしている親密の意識によって話題が展開していく様子が見られる。Xのことや箸の話題が間を置いて繰り返されることも、その場にいなければ理解しがたい情報を共有することによって親密さを感じることを目的とする談話のあり方の現れとも言えるだろう。このあたりは職場の同僚と、親しいながらも遠慮や相手の発話に対する配慮を持ち、ある程度の論理によって話題を展開して行こうとする成人の雑談とは明らかに異なった特徴を持っていると言えよう。

小論では論じる余地がないが、文末表現やさまざまな語彙の使い方にもこのような談話の意識は現れていると思われる。さらにそのあたりの分析をすること次の課題とし、またさまざまな若者の談話資料について、同様の傾向があるのかどうかを見て行きたいと思っている。

(1994.11 中国瀋陽にて)

<参考資料>

『職場における女性の話しことば』 1994. 5 現代日本語研究会